

語幹形態とアプラウトの間に見られる関係の特殊事例

下崙 正利

ゲルマン語の特徴の一つとして、特定の語幹形態と結びついた強変化動詞の7つのアプラウト系列があげられる。ゴート語では、アプラウトを示す動詞もあるが¹、主として語根重複により過去語幹を形成するのに対し、北・西ゲルマン語では、ほとんどの場合、アプラウトのみにより語幹形成を行い、語幹形態とアプラウトの関係に言語間で若干ずれも見られる強変化動詞第7種を除き、強変化動詞第1種～第6種の語幹形態とアプラウトの関係を示すと、次のようになる²。

| | |
|-----|--|
| 第1種 | -ī(C) (< -ei(C)) - ai(C) - i(C) - i(C) |
| 第2種 | -euC'(C') - auC'(C') - uC'(C') - uC'(C') |
| 第3種 | -eRC - aRC - uRC - uRC ³ |
| 第4種 | -eR - aR - ē ¹ R - uR |
| 第5種 | -eC' - aC' - ē ¹ C' - eC' |
| 第6種 | -aC - ōC - ōC - aC |

C = 子音

C' = 流音・鼻音以外の子音

R = 流音・鼻音

第1種から第3種は、インド・ヨーロッパ祖語の e-o-o-o というアプラウトをそのまま継承したものである。第4種は本来は、過去現在動詞のアプラウトから判断すると、e-a-u-u というアプラウトを行っていたと考えられるが、過去複数語幹に第5種の ē¹が入り込み、本来の u に取って代わっている。この ē¹の起源については、諸説あるが、はっきりしていない。第5種の過去分詞では、音素配列規則に反した音素配列が生じてしまうため、消失階梯ではなく、現在語幹と同じ標準階梯の母音が用いられている。第6種のアプラウトは、単一起源に遡るものでないことは確かであるが、はっきりしたことは分かっていない。

この語幹形態とアプラウトの結びつきにより、強変化動詞及び過去現在動詞のアプラウトはたいいていの場合容易に特定できるが、例外が若干存在している。上で挙げていない語幹形態のものや、上で挙げた語幹形態を示してはいるが予測とは異なったアプラウトを行うものが存在している。本稿では、そうし

¹ ゴート語の強変化動詞第7種の一部に見られるアプラウトは、北・西ゲルマン語の強変化動詞第7種のアプラウトとは完全に別種である。

² アオリスト現在形は省略している。

³ 第3種で語幹末子音が流音・鼻音の場合、それは先行する流音・鼻音と必ず同音である。

た強変化動詞及び過去現在動詞の内、第3種から第5種に属するものを取り上げ⁴、どのような動詞がそれに該当し、それらがどのようなプロセスを経て第3種から第5種のいずれかに組み入れられていったか、また言語間にどのような差異があり、それが語幹形態とどのような繋がりがあるかを提示していく。

語幹形態とアプラウト系列の基本的な結びつきから逸脱している動詞のほとんどが、幹母音の前に流音・鼻音を持つ動詞である。これらの動詞では、消失階梯において、インド・ヨーロッパ祖語の R が uR として現れたはずであるが、uR のままだと R の位置に相違が生じ、語幹形態の統一性が損なわれることになってしまう。この問題を何らかの方法で解消し第3種から第5種のアプラウト系列に組み入れる中で重要となるのが、幹母音の前後の形態である。そこで以下において、幹母音前後の形態ごとに、どのような適合化が行われているかを示していくことにする。また一つの語幹形態から類似した他の語幹形態に同一アプラウトが拡散していくことがあるが、それも併せて示して行く。なお、扱う言語は主に、ゴート語、古アイスランド語、古高ドイツ語、古ザクセン語、古英語とする。古フリジア語は、第4種と第5種が融合してしまっているため、第3種及び *mag との関連においてのみ取り上げることとする。

1.1. (C') (C')RVC'C'

ここで(C') (C')RVC'C' という表記の下にまとめた動詞は、RVC'C' という語幹形態のものと C'RVC'C' という語幹形態のものがそれぞれ1語ずつある他は、C'RVC'C' という語幹形態をしている。

(C') (C')RVC'C' という語幹形態の動詞は、過去複数語幹と過去分詞の語幹において音位転換を行うことにより、語幹の形を統一し、強変化動詞第3種に組み入れられている。言語別に該当する動詞を挙げると、次のようになる。

ゴート語 þriskan, gawrisqan

古アイスランド語 bregða, bresta, gnesta

古高ドイツ語 brëttan, brëstan, flëhtan, hrëspan, lëscan, drëscan

古ザクセン語 brëgdan, brëstan, flëhtan, lëscan

古英語 breздan, berstan, streздan, þerscan

古フリジア語 breida/brīda, bersta

この他、過去分詞しか残されていないものとして、古アイスランド語 roskenn(*wreskwan の過去分詞)、古高ドイツ語 fernoscenen(*-hneskwan の過去

⁴ 例外として、過去現在動詞の *mag は、第3種から第5種のどれにも属さないが、*-nah との語幹形態の類似性から取り上げることとする。なお、過去現在動詞を挙げる際には直説法現在1・3人称単数形を用いることとする。

分詞)があげられる。

ゴート語 *bliggwan*, 古アイスランド語 *hnøggva* も同様の語幹形態を示しているが、これらの動詞は本来強変化第2種で、Holtzmann の法則による音変化の結果、第3種のアブラウトを示すに至ったもので、よってここでは別扱いをした。古ノルウェー語 *bryggia* も同様である。

古英語 *berstan*, 古フリジア語 *bersta*, 古英語 *þerscan* は、*r* が幹母音の後ろにあるが⁵、これはゴート語、古アイスランド語、古高ドイツ語、古ザクセン語の語形が示しているように、まず語幹形態が *C'rVC'C'* に揃えられ、そしてその後全語幹で改めて音位転換が起こったものである⁶。

C'reC'C' – C'raC'C' – C'urC'C' – C'urC'C'

↓

C'reC'C' – C'raC'C' – C'ruC'C' – C'ruC'C'

(ゴート語, 古アイスランド語, 古高ドイツ語, 古ザクセン語の状態)

↓

C'erC'C' – C'arC'C' – C'urC'C' – C'urC'C'

(古英語, 古フリジア語の状態)

1.2. C'VC'C'

fehtan* は西ゲルマン語特有の動詞であるが、幹母音の前にも後ろにも流音・鼻音を持たないにもかかわらず、すべての言語で第3種のアブラウトを示している。これは、語幹が流音・鼻音以外の子音2つで終わる点が前述の (*C'*) (*C'*) *RVC'C'* という語幹形態の動詞と共通しており、類推が働いたためと考えられる。とりわけ、flehtan* は **fehtan* と形態が類似しており、強い影響を及ぼしたものと考えられる。古英語には **fleohtan* という動詞は残されていないが、*flohtenfōt* という形容詞の前半部にその痕跡を見ることができる。古フリジア語でも、**fliuhta* は残されていないが、これもたまたま文献に残されていないだけか、あるいはかつては存在していたと思われる⁷。

古アイルランド語 *tyggva* も *C'VC'C'* という語幹形態を示し、第3種であるが、本来は第2種であり、上記の *hnøggva* と同様に、Holtzmann の法則による音変化の結果、第3種となったものである。

⁵ 中期オランダ語の *bersten*, *derschen* も音位転換を示している。

⁶ 古英語の *berstan*, *þerscan* については、*e* が *rCC* の前で割れていないことから、*e* の割れより後に音位転換が起こったことが確認できる。

⁷ 現代西フリジア語の *flechtsje* は、*flechtsje – flechte – flechte* という弱変化と並んで *flechtsje – flocht – flochten* という強変化もするが、この強変化形には、オランダ語の影響が見られ、**fliuhta* < **flehtan* とは少なくとも直接的には結びつかない。

1.3. C'RVC'n

freh/gnan の語幹末の n は、本来現在語幹形成要素であり、ゴート語 fraihnan と古アイスランド語 fregna ではまだ本来の機能で用いられており、現在語幹以外ではこの n は消える。ゴート語の fraihnan も古アイスランド語の fregna も、強変化動詞第5種である。それに対し、古ザクセン語 fregnan と古英語 friznan では n がすべての語幹に入り込み、語幹形態が C'RVC'C' に近い C'RVC'n となっている。それにより、C'RVC'C' という語幹形態の動詞の影響を受け、古ザクセン語 frēgnan は本来強変化第4種あるいは第5種、古英語 friznan は強変化第4種だったものが、共に強変化第3種のアブラウトを行うようになって⁸。

2.1. C'(C)RVC'

C'(C)RVC' という語幹形態のものはほんの数語で、大多数は C'RVC' という語幹形態である。C'(C)RVC' という語幹形態の動詞は、過去分詞において音位転換を行い第4種に組み入れられるか、あるいは語幹末子音が流音・鼻音以外の子音であることから、C'(C)VC' という語幹形態の動詞と同様に過去分詞において現在語幹と同じく標準階梯を用い、第5種に組み入れられている。第4種に組み入れられた動詞と第5種に組み入れられた動詞を言語別に挙げると、次のようになる。

第4種

ゴート語 brikan, trudan

古アイスランド語 troða

古高ドイツ語 brēhhan, trēffan, sprēhhan, trēhhan, rēhhan (<*wrekan)

古ザクセン語 brēkan, sprēkan, wrēkan

古英語 brecan, hlecan

第5種

ゴート語 fraihnan, hlifan, (sniwan)⁹, wrikan

古アイスランド語 drepa, fregna, freta, trega, reka (<*wrekan)

古高ドイツ語 fnēhan, knētan, krēsan, phlēgan, strēdan, trētan

古ザクセン語 drēpan, knēdan, plēgan, trēgan

古英語 drepan, friczan, cnedan, plēon, screpan, spreccan, tredan, wreccan

⁸ 古ザクセン語の frēgnan が元々第4種であったか第5種であったかは不明である。古英語には、-n-の無い直説法過去複数形 fruzan, 過去分詞 gefruzen が残されている。Brunner³(1965), §369, Anm.3を参照のこと。

⁹ sniwan は過去分詞の用例が無いため、第4種か第5種かはっきりしないが、普通第5種とされている。Braune/Heidermanns²⁰(2004), §176, Anm.2を参照のこと。

複数の言語に存在し、そのどれにおいても第4種となっているのは、*brekanのみである。古高ドイツ語と古ザクセン語では、*brekanと同じく語幹が germ. k に終わる動詞はすべて同様に第4種である。それ以外の言語では、語幹が germ. k で終わるかどうかは、どのようなアプラウトを行うかとは関係が無い。ゴート語では brikan が第4種であるのに対し wrikan は第5種、古アイスランド語では語幹が k で終わる動詞は reka のみであるがこれは第5種、古英語では brecan と hlacan が第4種であるのに対し sprecan と wrecan は第5種である。古高ドイツ語と古ザクセン語では、語幹が germ. k で終わる動詞において、第4種のアプラウトの類推的拡張があったものと考えられる。

*drepan は、古高ドイツ語 treffen が第4種の他は、古アイスランド語 drepa, 古ザクセン語 drepan, 古英語 drepan すべて第5種である。しかしながら、古英語には1例のみではあるが dropen という過去分詞が残されており、また同一語根を含む i- 語幹男性名詞にも消失階梯を持つ drype が存在している。これらのことから、古英語の drepan については、第4種から第5種へ移行した可能性が考えられる。

*trudan/*tredan は本来アオリスト現在形を持ち、ゴート語 trudan と古アイスランド語 troða は本来の形を保持している。アオリスト現在形を持つ場合、標準階梯の過去分詞を形成することができず、必然的に第4種に組み入れられることになる。古高ドイツ語 trëtan と古英語 tredan では、現在語幹が標準階梯を持つようになり、それに伴い第5種へと移行している¹⁰。同一語根を持つ語として、古高ドイツ語には ā- 語幹女性名詞の trota, 弱変化動詞第2種の trotōn が、古英語には a- 語幹中性名詞の trod, ā- 語幹女性名詞 trodu が存在しているが、どれも音位転換を行った消失階梯語根を持っている。これらは、アオリスト現在形を持ち第4種の活用をしていた頃の名残である。

2.2. C'C'Vk

古高ドイツ語の stēhhan は、語幹中に流音・鼻音を全く含んでいないが、第4種である。これは、C'C'Vhh- < C'C'Vk- という語幹形態が brēhhan 等の語幹形態 C'RVhh- < C'RVk- に類似しているためにこれに倣ったアプラウトを行うようになったためである。古ザクセン語の stekan は、過去分詞の用例が残されていないので、第4種か第5種か判定できない¹¹。中低ドイツ語の steken は第5種である¹²。

¹⁰ Paul (1968 [1917]), § 168, Anm.2及び Ringe² (2017), 274-275頁を参照のこと。

¹¹ Gallee² (1993) は、stekan を第4種としている (§ 394, Anm.1)。Lasch² (1974) も、中低ドイツ語の steken は第4種から第5種へ移行したものとみなしている (§ 429, Anm.3)。

¹² 中期オランダ語の steken も第5種である。

3. RVC'

RVC' という語幹形態の動詞は、過去分詞で標準階梯を用いることにより、第5種へと組み入れられている。言語別に示すと以下ようになる。

ゴート語 *ligan, mitan, nisan, rikan*
古アイスランド語 *liggia, leka, lesa, meta, rökkva*
古高ドイツ語 *liggen, lēhhan, lēsan, mēzzan, nēsan, rēhhan* (<*rekan), *rēdan*
古ザクセン語 *liggian, lēsan, ginēsan*
古英語 *liczan, lesan, metan, zenesan*

この内、古高ドイツ語 *lēhhan* は、標準階梯を用いた第5種の過去分詞と並んで、音位転換を行った消失階梯を用いた第4種の過去分詞も有している。また、中高ドイツ語 *rēchen* も、古高ドイツ語 *rēhhan* は第5種であるものの、第4種である。古高ドイツ語 *lēhhan* も中高ドイツ語 *rēchen* も共に語幹が *hh* < germ. *k* に終わっており、第4種の形は、C'RVk- という語幹形態の動詞に倣ったものであることは明らかである。もっとも、第4種へ移行させる類推の力は、*stēhhan* の場合ほどは強く働いていない。Braune/Reiffenstein¹⁵(2004)において、*lēhhan* と *rēhhan* は、語幹が *hh* に終わる第4種について記述している § 341の Anm.1で取り上げられているが、C'RVk と RVk という語幹形態の相違には全く言及がない。語幹が -Vk に終わる強変化動詞における第4種のアプラウトの拡散については、C'RVk, C'Vvk, RVk という語幹形態を区別して考察する必要がある¹³。

過去現在動詞に目を移してみると、*-nah は、強変化動詞とは異なったアプラウトを示している。ゴート語では現在3人称単数形が -nah、過去分詞強変化中性単数主格形が -nauht、古英語では、現在1・3人称単数形が -neah、現在複数形が -nugon で、共に古い第4種のものである a~u というアプラウトと、消失階梯を持つ形態での音位転換¹⁴を示している。

mag は、-nah と同様の語幹形態をしているが、*-nah とは相違が見られる。各言語の直説法現在1・3人称単数形、直説法現在1人称複数形、直説法過去1・3人称単数形を示すと、次のようになる。

ゴート語 *mag – magum – mahta*
古アイスランド語 *má – megom – máttá*¹⁵

¹³ Ringe²(2017)は、CR-で始まる強変化動詞とR-で始まる強変化動詞を分けて扱っているが、R-で始まる強変化動詞はすべて第5種であるとしており、古高ドイツ語 *lēhhan*、中高ドイツ語 *rēchen* には言及していない(256頁)。

¹⁴ ゴート語の形容詞 *biūhts* (<*bi-ught-)に、同一語根の音位転換を起こしていない消失階梯が含まれている。

¹⁵ 古アイスランド語の *kná – knegom – knátta* は、*má* に対する類推によるものである。

古高ドイツ語 mag – magum/mugum – mahta/mohta
 古ザクセン語 mag – mugun – mahta/mohta
 古英語 mæg – magon – meakte
 古フリジア語 mei – mugen/mogen – machte/muchte/mochte

ゴート語と古英語では、すべての語形で germ. a が現れている。古アイスランド語の megom の e は、接続法の幹母音が直説法に入り込んだもので、従って古アイスランド語もすべての語形で germ. a を持つということになる。古高ドイツ語では直説法現在単数形で germ. a、直説法現在複数形と直説法過去形で germ. a と germ. u が現れるが、初期においては直説法現在複数形と直説法過去形の幹母音は germ. a のみで、germ. u が現れるのは9世紀以降である。古ザクセン語と古フリジア語は、直説法現在単数形では germ. a、直説法現在複数形では germ. u、直説法過去形では germ. a と germ. u の両方が現れる。ゴート語、古アイスランド語、古英語ではすべての変化形で germ. a が現れること、古高ドイツ語でも初期には germ. a しか見られないこと、古ザクセン語と古フリジア語でも過去形で germ. u と並んで germ. a が現れることからすると、*mag はすべての語幹で幹母音が germ. a であったと考えるのが妥当であろう。germ. u は、第2種から第4種のアプラウトの影響で、取り込まれたものと考えられる。このことは、通常消失階梯と結びつく idg. -ti- による派生名詞の幹母音が消失階梯の germ. u ではなく germ. a であることから裏付けられる¹⁶。

ゴート語 mahts, 古高ドイツ語 maht, 古ザクセン語 maht, 古英語 meakt,
 古フリジア語 macht

4. (C')wVC'

語幹形態とアプラウトの基本的結びつきから逸脱している動詞には、数は少ないが、幹母音の直前に germ. w を持つものがある。問題となるのは、古アイスランド語 vefa と古アイスランド語 sofa である。

古アイスランド語 vefa は、vefa – vaf – ófom – ofenn と第4種の活用するが、過去分詞の o は、消失階梯で germ. w が母音化したものである。この germ. w の母音化により、幹母音の前に germ. w を伴う形態と伴わない形態が生じ、語幹形態の統一性が損なわれることになるが、それが許容され、古アイスランド語の ofenn という過去分詞の形態にそのまま繋がっているのか、それとも過去分詞において類推的に w が語頭に置かれた後、再度 o の前で w が脱落したのかは不明である¹⁷。古高ドイツ語 weban, 古ザクセン語 weban, 古英語 wefan

¹⁶ 古アイスランド語の mátt (< *mahtuz) は idg. -ti- ではなく idg. -tu- による派生である。

¹⁷ 初期ノルド祖語ではまだ円唇母音の前での w の脱落は起きていない。Krause (1991), § 16 を参照のこと。

では過去分詞で標準階梯が用いられ、第5種となっている¹⁸。これには、過去分詞における w の母音化により語幹形態の統一性が損なわれるのを避けるためもあったと考えられる。

古アイスランド語 sofa は、sofa – svaf – sófom – sofenn と活用するが、現在語幹の o も過去分詞の o も、we が変化したものか、消失階梯で w が母音化したものか不明である。古英語の swefan は、第5種である。

5. -VR

冒頭で述べたように、語幹が単一の流音・鼻音で終わっている場合、第4種となる。しかしながら、1語例外が存在している。古高ドイツ語及び古ザクセン語の klēnan は¹⁹、語幹が n に終わっているが、第5種である。Braune/Reiffenstein¹⁵(2004), § 340, Anm.2では、klēnan は第4種から第5種へ移行したとされている。しかしながら、klēnan に第4種の痕跡は無く、第4種の語幹形態を有していながらなぜ第5種へ移行したのか、極めて不可解である。語源的にみると、klēnan は *gleiH- という語根から形成されており、本来はアオリスト現在形を持つ強変化第1種であった²⁰。だとすると、klēnan の第5種のアプラウトは、アオリスト現在形を伴った強変化動詞第1種のアプラウトを出発点とし、そこからの移行がどのように起こったかという形で考えるべきであろう。本来アオリスト現在形を持つ第1種だったが第5種へと移行して動詞には他に *wigan があるが、両者の第5種への移行には、共通したプロセスがあるものと考えられる。この問題については、稿を改めて論じてみたい。

語幹形態とアプラウトの間に見られる関係の特殊事例については、個別言語的な記述はあるものの、ゲルマン語全体について詳細に述べたものは、筆者の知る限り無い。本稿では、当該動詞がいかにして第3種から第5種のいずれかへと組み込まれていったか、またその際、言語間でいかなる共通性と相違が見られるかをゲルマン語全体について語幹形態別に示してみた。語幹形態に関しては、語幹末子音だけでなく語幹頭子音も考慮に入れた上で、構成する音の数と種類に応じた分類が必要であり、(C')(C')RVC'C', C'VC'C', C'RVC'n, C'(C')RVC', C'C'Vk, RVC', (C')wVC', -VR という分類の下で考察を行った。本稿がゲルマン語の歴史・比較言語学的研究のための一助になれば幸いである。

¹⁸ 古アイスランド語と同じく北ゲルマン語であるが、古スウェーデン語の vāva も第5種である。

¹⁹ 古ザクセン語には過去分詞の biklēnan しか残されていない。

²⁰ 語幹末の n は本来現在語幹形成要素であり、それが全語幹に一般化したものである。

参考文献

- Benecke, Georg Friedrich, Wilhelm Müller u. Friedrich Zarncke 1990: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*, 3 Bde., Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-1866, Stuttgart.
- Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller ¹¹1991: *An Anglo-Saxon dictionary*, Oxford University Press.
- Braune, Wilhelm ¹⁵2004: *Althochdeutsche Grammatik 1, Laut- und Formenlehre*, bearb. von Ingo Reiffenstein, Tübingen.
- ²⁰2004: *Gotische Grammatik*, neu bearbeitet von Frank Heidermanns, Tübingen.
- Bremmer Jr., Rolf H. 2009: *An introduction to Old Frisian*, Amsterdam/Philadelphia.
- Brunner, Karl ³1965: *Altenglische Grammatik*, Tübingen.
- 1951: *Die englische Sprache, ihre geschichtliche Entwicklung*, 2. Band, Halle (Saale).
- Campbell, Alistair 2003 [³1968]: *Old English grammar*, Oxford.
- Cleasby, Richard and Gudbrand Vigfusson 1993 [²1957]: *An Icelandic-English dictionary*, second edition with a supplement by William A. Craigie, Oxford.
- Franck, Johannes 1883: *Mittelniederländische Grammatik*, Leipzig.
- Fulk, R.D. 2018: *A comparative grammar of the early Germanic languages*, Amsterdam/Philadelphia.
- Gallée, Johan Hendrik ³1993: *Altsächsische Grammatik*, Tübingen.
- Gutenbrunner, Siegfried 1951: *Historische Laut- und Formenlehre des Altisländischen*, Heidelberg.
- Heusler, Andreas ⁷1967: *Altisländisches Elementarbuch*, Heidelberg.
- Hofmann, Dietrich u. Anne Tjerk Popkema 2008: *Altfriesisches Handwörterbuch*, unter Mitwirkung von Gisela Hofmann, Heidelberg.
- van Kerckvoorde, Colette M. 1993: *An introduction to Middle Dutch*, Berlin/New York.
- Köbler, Gerhard 1989: *Gotisches Wörterbuch*, Leiden.
- 1993: *Wörterbuch des althochdeutschen Sprachschatzes*, Paderborn.
- Krahe, Hans ²1967: *Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen*, bearbeitet von Elmar Seebold, Heidelberg.
- ⁷1969a: *Germanische Sprachwissenschaft I*, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- ⁷1969b: *Germanische Sprachwissenschaft II*, bearb. von Wolfgang Meid, Berlin.
- Krause, Wolfgang ³1968: *Handbuch des Gotischen*, München.
- 1971: *Die Sprache der urnordischen Runeninschriften*, Heidelberg.
- Lasch, Agathe ²1974: *Mittelniederdeutsche Grammatik*, Tübingen.
- Lexer, Matthias 1992: *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch*, 3 Bde., Nachdruck der

- Ausgabe Leipzig 1872-1878, Stuttgart.
- Lübben, August 1970 [1882]: *Mittelniederdeutsche Grammatik*, Osnabrück.
- 1989 [1888]: *Mittelniederdeutsches Handwörterbuch*, nach dem Tode des Verfassers vollendet von Christoph Walther, Darmstadt.
- Meid, Wolfgang 1967: *Germanische Sprachwissenschaft III*, Berlin.
- Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson 2001: *A guide to Old English*, sixth edition, Blackwell Publishing.
- Mossé, Fernand 1969 [²1956]: *Manuel de la langue gotique*, Paris.
- Noreen, Adolf ⁵1970: *Altnordische Grammatik I*, Tübingen.
- 1904: *Altnordische Grammatik II, altschwedische Grammatik*, mit Einschluß des Altgutnischen, Halle.
- Paul, Hermann 1968 [1917]: *Deutsche Grammatik, Band II*, Tübingen.
- ²³1989: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, neu bearbeitet von Peter Wiehl und Siegfried Grosse, Tübingen.
- Prokosch, Eduard 1939: *A comparative Germanic grammar*, Linguistic society of America.
- Ranke, Friedrich u. Dietrich Hofmann ⁴1979: *Altnordisches Elementarbuch*, Berlin/New York.
- Ringe, Don ²2017: *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic (A linguistic history of English, volume I)*, Oxford University Press.
- Ringe, Don and Ann Taylor 2014: *The development of Old English (A linguistic history of English, volume II)*, Oxford University Press.
- Rix, Helmut 1998: *Lexikon der indogermanischen Verben, die Wurzeln und ihre Primärstammbildungen*, bearbeitet von Martin Kümmel, Thomas Zehnder, Reiner Lipp, Brigitte Schirmer, Wiesbaden.
- Schützeichel, Rudolf 2006: *Althochdeutsches Wörterbuch*, 6., Auflage, überarbeitet und um die Glossen erweitert, Tübingen.
- Seebold, Elmar 1970: *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*, The Hague.
- Sehrt, Edward H. 1966: *Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur altsächsischen Genesis*, 2. durchgesehene Auflage, Göttingen.
- Splett, Jochen 1993: *Althochdeutsches Wörterbuch*, 2 Bde., Berlin/New York.
- Streitberg, Wilhelm 2000: *Die gotische Bibel, Band 2, Gotisch-Griechisch-Deutsches Wörterbuch*, 6. Auflage, Heidelberg.
- de Tollenaere, Felicien and Randall L. Jones 1976: *Word-indices and word-lists to the Gothic bible and minor fragments*, Leiden.
- Verwijs, Eelco en Jakob Verdam 1885-1952: *Middelnederlandsch woordenboek*, 9

banden en 2 suppl., The Hague.

Wright, Joseph 1981 [1910]: *Grammar of the Gothic language*, second edition with a supplement to the grammar by O. L. Sayce, Oxford University Press.

Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright 1984 [1925]: *Old English grammar*, third edition, Oxford University Press.

Zoëga, Geir T. 1981 [1910]: *A concise dictionary of Old Icelandic*, Oxford.